

## 丹後地方衣生活調査から

—近代における自給的機織と荒山縞のこと—

奥 村 萬 亀 子

### Field Researches on the Clothing-Habits of the *Tango* District Inhabitants

—Their Home-Made Textiles in the Earlier Period of this Century  
and the *Arayama-zima* Woven by the *Arayama* Villagers—

MAKIKO OKUMURA

丹後地方は伝統的衣生活様式を比較的長く保っていた地域である。近代においてその衣生活様式が変化して行く状況を、特に衣服の素材である織物の自給ということに焦点をあてて見て行く。丹後地域在住者の生活体験を基にして、明治後期から昭和前期に至る織物自給の状況、自給的機織の消滅の経過、自給的織物に代るものとしての荒山縞の盛況のさまなどについて述べる。

丹後地方における伝統的衣生活様式が近代においてどのような変化をみせて来たかを記録するため、昭和56・57年度に調査を行った。その一部については、すでに報告したが<sup>1)</sup>、紙数の関係で報告し得なかった部分とそれに続く調査から今回報告する。

伝統的衣生活様式というものは、地域の自然条件や生産活動、労働条件などとの関わりや、自給の生活を基本として成り立つものととらえることが出来よう。いわゆる民俗服といわれる衣服類の様式や素材やそれらの自給のさまである。ここでは、この衣服類の自給が近代においてどのような型で行われ、どのように変貌していったかをとりあげる。特に衣服類自給の最も基本的なものである製織について述べる。

丹後地方は伝統的な生活様式を比較的近年まで残していた故、その変化の跡をたどることが可能であり、そこには、この地方特有の衣生活様式を見ると同時に、わが国近代における衣生活様式変化の一つの典型

をも見ることが出来よう。近代産業社会への発展の中で自給的な製織形態は自然に消滅して行くのであるが、その経過の中で自給的生産が一地域の産業として成立し、一時代を形作り、近代化への経過の中で特徴ある一様態を作りあげた事実も今回の調査で知ることが出来た。いわゆる「荒山縞」といわれるものである。これについても合わせて報告する。なお、調査期間は昭和56～58年度、調査方法は主として丹後地方在住者への聞きとり調査である。

#### （1）丹後地方における機織について

自給自足が生活の原理であった農山村では機織は長く女性の家事労働の一つとして残るのであるが、この地方では自給的な機織と並んで縮緬産地としての地域性から、職業としての機織も入り組み、人々の機織との関わりは強いものであった。

## ① 麻、綿、絹織物の場合

農山漁村の生活において日常着、労働着が最も必要とされるが、そのための織物が自給的に織られたのは、この地方では麻は明治末頃、木綿は大正年間までかと思われる。聞きとり調査においても麻織物製織の経験者は非常に少い。木綿については大正初期頃には、綿を買って糸を引くか或いは木綿糸を購入し、自家或いは紺屋で染め織っていた。綿を作り糸を紡ぐということは非常に少なかった。木綿縞、糸縞、ガス縞などが織られた。糸縞は絹と木綿を混ぜて織ったもので上等の着物用として愛用された。

この地方は丹後縮緬の産地であるということと、またグンゼ製糸が近くにあったということもあり、非常に養蚕が盛んであった。養蚕の経験のない家は殆んど皆無とっていいくらいである。貧富にかかわらず、どの家庭でも養蚕のため、夜も寝ないほど忙しい生活をした。この養蚕によって出来た屑繭は、自家の着物にとって大切なものであった。良い糸は売るが、屑繭や大繭から引いた節のある糸は自家用とした。糸縞はこうした絹糸を木綿糸に交ぜて織ったものである。また、地絹と呼ばれる自家用の絹織物もこうした糸で織ったものである。少し節があり羽二重のような感触がある。軽くて肌ざわりがよく、夏物にもよい。丹後の女性なら誰でも一、二枚は持っているといわれる。式服に作られることが多く、この地の女性の晴れの服を担っている。そして、この地絹が織られたのも木綿織と同じ頃までである。そこで、古老たちの経験談をここに収録し、明治後半期から大正期にかけての、この地の衣生活の一端をうかがうこととする。

Aさん—明治16年(1883)生。調査当時99才。男。味土野出身—「とにかくすべてが自給自足の生活だった。織物は冬の女の仕事だった。11月～3月の5ヶ月ぐらい雪に埋もれて外に出られないので、一冬に6反ぐらいは織った。野田川から綿を買って来て、これを糸に紡ぎ、紺屋で染めてもらう。茶色や何かは家で染めた。子供の頃、梅やその他木の皮を、雪の中、山へ取りに行った。木綿に蚕さんの糸を交ぜて糸縞を作る。子供にこれを着せるとすごくいい小袖を着せているような気になったものだ。子供の頃、糸縞を着せられると大事にせにやいかんとよく云われたものである。木綿糸半分、絹糸半分で大人の着るものも作った。紋付以外では、これを着ればもう小袖を着ているような気持であった。婚礼などには白いきものを着るが、そうでないものは糸縞を着るともう小袖だった。(つまり最上級のものだった)麻は明治の頃、紺に染

めてシャツにした。夏仕事に着た。上等のものだった。藤布も明治の頃、年に二反ぐらいは織った。米二斗入りの袋を作った。おばあさんは大正初め頃まで機織をしていた。」と語る。これは最も自給生活を強いられる山間僻地の場合で、自給の生活様式を長くとどめていた地域である。

Bさん—明治21年(1888)生。調査当時94才。女。峰山出身岩滝在住—「娘の頃には機の稽古をした。木綿糸を買って来て紺屋で染めてもらう。杵に巻いて繰る。一よみ二よみなど九寸幅に何本の糸を繰るか、縞の組合わせをして機にあげたものだ。木綿に絹をよってもらって織った。ガス糸が入って来てからはガス縞を織った。絹とガスのものも織った。絹は白くきれいにして喪服にしたり、黒に染めて紋付羽織にした。柄を染めたものもある。日常着や兄弟のものも織り、お嫁に持って来るものも織った。」Bさんは娘時代に織った布の端裂を大切に手箱にしまっていた。今回資料に提供して下さい。(写真①～⑥)

Cさん—明治30年(1897)生。調査当時85才。女。丸山出身—「自分で織った着物を沢山お嫁に持って来た。地絹は白は下着に、上着には模様を染めてもらった。絹は練らずに染めに出し、染め屋が練って柄をつけてくれた。木綿は糸を買って織った。木の葉などで染めたこともある。染め粉でも染めた。これを糸縞にすることもあった。ガスと木綿縞、ガス縞なども織った。これは箆が軽くて織りやすかった。子供のスモックや蒲団の側にした。裏には紺木綿を買った。冬仕事には藁仕事より織る方がよかった。」

Dさん—明治31年(1898)生。調査当時84才。女。大呂出身—「機織は母から習った。娘の教養として機も織れないようでは恥しいといわれた。縞ぐみから何から教えてもらった。木綿織、絹織物を嫁入りに持って来た。木綿は糸を買って来て織った。」

Eさん—明治29年(1896)生。調査当時86才。女。関在住—「機道具はあったが自分自身は織らなかった。女中には縞木綿を織らせていた。それはおしきせとして自分のものにさせた。」これは庄屋という家柄による場合である。

Fさん—明治30年(1897)生。調査当時85才。女。野間出身—「母は木綿でも何でもよく織った。冬になると綿を紡いで木綿糸をとり、これを峰山の紺屋に染めに行き織って縫って子供に着せた。これが母の仕事であった。綿はよそではちょいちょい作っているところがあったが生家では作っていなかった。綿を買って来た。絹も織って染めてもらった。母の織った地絹

を染めてもらい羽織や長襦袢にしたものを今も持っている。娘の頃に絞り染めにもした。しかし、母は機織のようなしんきくさいものは、これからの世の中にはいらないから憶えなくてもよいとって教えなかった。その代りに編物を教えた。母も編物をよくした。」

Gさん—明治29年(1896)生。調査当時86才、女。岩滝出身—「娘の頃から機織に出た。家では蚕を沢山飼っていた。良い繭は宮津の問屋に売り、次のものを家で糸に引き機を織った。母はよく織った。自分の嫁入りの時白無垢二枚織ってくれた。無地に染めて羽織にして今も持っている。長男が生まれた時には、重ね産衣を織って祝にしてくれた。自分は糸引きが上手だったので結婚してからも機屋に長くつとめた。」

Hさん—明治30年(1897)生。調査当時85才、女。溝尻出身—「娘の頃は縮緬屋に織り奉公に出た。嫁に来てからも冬や暇な時だけ掛機や賃機を織った。自分のものを織るということではなかった。」

ここに挙げたものは明治30年頃までに生まれた人たちの機織に関する生活体験である。これらの人々の機織との関わりは、次の三つの型としてとらえることが出来る。

- (1) 自給の生活を堅実に守って衣生活を支えて行く姿。(A-E)の場合。
- (2) 新しい時代の到来を察知し、生活を切り替えようとする姿。(F)の場合。
- (3) 機業地で専門職としての技術は持つが、自家のものは織らない姿。(G-H)の場合。

この(1)の生活は大正初期迄に成人した人たちの生活のパターンであり、これより以後の人たちには殆んど受けつがれなかった。それ以後の人たちは、母親がいつも織っているのを見ていたとか、少し糸引きを手伝ったとか、少々は習ったが実際はあまり織らなかったとかいう経験である。(2)はその転換期の姿であろう。しかし、明治30年代後半期生まれの人達も必ずといっていいほどみんな母親に織ってもらった地絹の着物を嫁入り時に持って来ている。特に式服として持って来る風習がある。例えば、

Iさん—明治38年(1905)生。調査当時77才、女。本庄浜出身—「母は地絹を織って娘たちに嫁入りに持たせた。姉には白無垢と黒(夏の紋付)を持たせた。みんなこうして白無垢と黒を持って行くのがならわしだった。その他に蚊帳まで織って持って行かせた。しかし母も年をとり、だんだん織らなくなり、中の姉や自分の時にはあまり作らなかった。中の姉は黒服のみ、自分は白無垢のみを織ってもらった。」とい

っている。

こうして木綿織にしても地絹にしても大正年間には殆んど織られなくなってしまったと考えられる。しかし、(3)の如く機業地との関係で若い時に機織奉公に出て、織技を身につけている人が多く、家庭に入ってから簡単に機織になじめる。農閑期には、縮緬屋から屑糸をもらい受けて織ったりする。戦争中は特に衣料の不足から裂織の帯を織るなど織技を役立てた。

## ② 藤布について<sup>2)</sup>

日本の山村で古くから織られたものに藤布があるが、現在丹後地方で藤布を織っているのは世屋地方のみである。古くは味土野、木子、駒倉など山間の村で行われた。世屋の老人たちは子供の頃、材料採りに父親につれられて山を歩いたものだと言う。その頃は一戸当り年に十反ぐらいずつ織った。村で共同で売って納金に当てていた。二斗入りの米袋(スマブクロ)、蒸し器に敷く布、畳の縁、味噌こしなどに使われた。近年では京都方面に買いとられ、座ぶとん、ハンドバッグ、財布などに加工されている。

## ③ 裂織(さっこり・さっくり)と刺し子

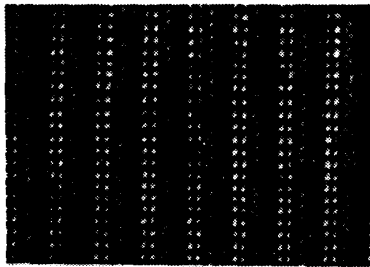
「さっくり、久僧地区を中心に用いられた仕事着兼雨具である。これを着て山へ入っても茨の方が避けるといわれている程強靱なものである。この色とりどりの布切れの特殊な織物の持つ素朴さ強靱さ美しさは特に目立つ。どんざ(漁師がきる布製の作業衣)漁師はどんざに足半」と『丹後町史』(昭和51年、丹後町刊)には記されている。いずれも海岸部特有の衣類であり、どんざは刺し子の仕事着でサシコ、ドンザ、ドウブクなどと呼んでいる。

裂織は着古した木綿織物を横布に裂き、これに縫いをかけて緯糸とする。経糸には麻や木綿糸あるいはツウジ(綜統を吊る麻糸)を使って織る。織幅は30cm位で、これを二幅用い背中央ではぎ合わせ、脇をとじ衿をつける。袖無しのもの、木綿布のもじり袖をつけるものがある。丹後町や伊根町の漁村で用いられた。防水、防寒の用を果し、かさ低く労働に便利であった。冬の海苔採りには必ずこれを着たし、ぶりおおしきには村中がこれを着た。袖無しのさっこりは樵、たきぎとり、田畑に出る時に着た。この地方の海辺の村では、どこの家にも二、三枚のさっこりのない家はなかったといわれる。しかし、Jさん—明治37年(1904)生、調査当時78才、泊在住。女一は、「自分たちの代にはもう織らなかった。家にあるものを使った」という。Iさん(前掲)は、「自分は末っ子で母が年寄りだったからさっこりを織ってくれ、これを嫁入りに持

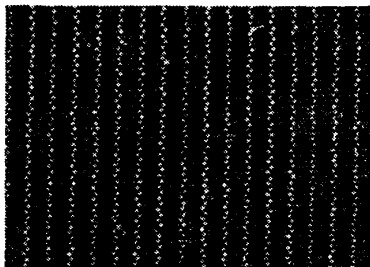
って来た。姉が嫁に行く時も母は木綿を買って来てさっくりの山着を織って持って行かせた」という。丹後郷土資料館には、明治24年生の梅垣てつさん(本庄浜)が、昭和30年頃に織ったというさっくりが所蔵されている。おそらく最後の作品かも知れない。これらさっくりは、昭和30年代にビニールのカップが出まわる迄使われた。Kさん一昭和8年(1933)生、泊在住。女一が昭和31年に嫁いで来た頃は、さっくりを着て仕事をしたという。ビニールのカップが出て来ると、これ

の方が軽くて恰好もよいのでみんなこれに代ってしまった。

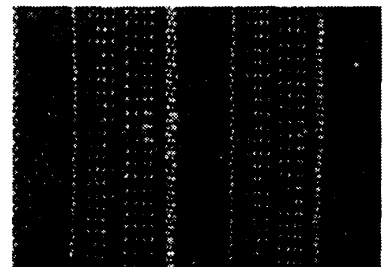
同じ海浜部の村でも大島、亀島などでは刺し子が用いられた。これは織り物ではないが、木綿布や着古した着物地を白い木綿糸で細かく刺し仕事着に作り上げるものである。腰丈、筒袖の襦袢のようなもので、衿も袖も全体が刺し子布である。布目を拾って細かく刺していく。『刺し子と裂き織り』(京都府立丹後資料館刊)によると、一の字刺し(一文字刺)、石垣刺し(石



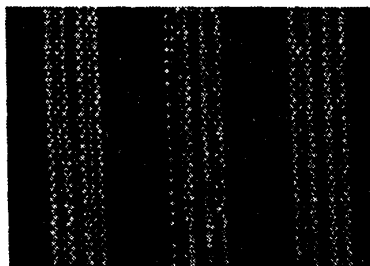
①



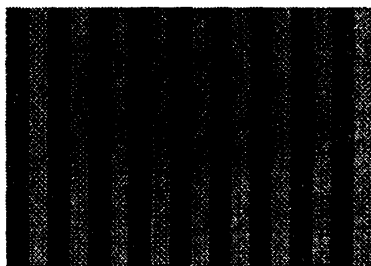
②



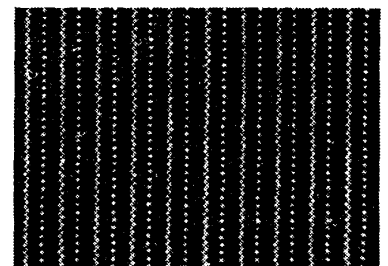
③



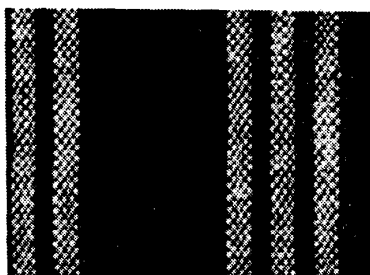
④



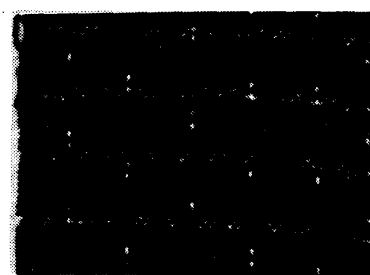
⑤



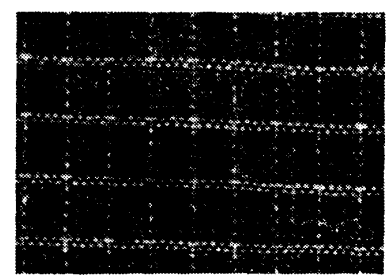
⑥



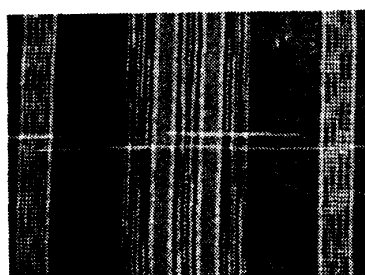
⑦



⑧



⑨



⑩

#### 自家用手織 ①～⑥

- ① 岩滝採集 木綿縞
- ② 岩滝採集 木綿とガス糸
- ③ 岩滝採集 木綿と絹(黄色)
- ④ 岩滝採集 木綿と絹(細い黄色)
- ⑤ 岩滝採集 ガス糸と絹(黄色)
- ⑥ 岩滝採集 ガス糸と絹(白色)

#### 荒山縞 ⑦～⑩

- ⑦ 荒山中野採集 手機織
- ⑧ 福知山採集 動力機織
- ⑨ 福知山採集 動力機織
- ⑩ 福知山採集 動力機織

⑧～⑩は荒山の行商人の常宿であった家から採集。

硫化染による退色が著しい。

(写真はや等倍)

垣くづし), 亀甲, 菱形 (松前刺し), 麻の葉, 七宝, 扇面などが収録されている。中には海辺に宮殿の文様を刺したものもある。Lさん—明治38年(1905)生, 大島在住, 当時77才, 女—によると, 「姑さんは刺し子が上手だったので家には5~6枚もあった。嫁に来た当時, 少し刺し方を習ったが一着を作りあげる迄に到らなかった。衿の部分ぐらいを刺した。これは重いので百姓仕事にはあまり着なかった。漁に出る時や魚売りに出る時などに着た。」とのこと。

これらの製作技術も明治30年代後半期生まれの人達のあたりで途絶えていることがわかる。

## (2) 荒山縞 (丹後縞) について

大正期に入り次第に自給的な機織をしなくなったこの地の人達が, それに代って労働着, 日常着に多く用いた木綿布に荒山縞がある。丹後地方の多くの老人たちが荒山縞使用の経験を語る。ところがこれについては意外に実態が知られておらず, 郷土誌などの記録にも全く記されていない。「荒山縞」の名は, この布が中郡峰山町荒山辺を中心に織られていたことによっており<sup>3)</sup>, 丹後以外の地へ行くと「丹後縞」と呼ばれることもある。はたしてどのようなもので, どの程度の

表1 京都府における綿織物生産高のうち「双子その他縞木綿」の場合

(単位: 反)

市郡 年	京都市	愛宕	葛野	紀伊	宇治	綴喜	相楽	南 田	北 田	船井	何鹿	天田	加佐	与謝	中	竹野	計
明治39							5,000								690		
40	50				65		7,583	282	20		495				158		
41	6,475				60		6,913		22						300		
42	14,457		54		70		10,000	133		44					4,008		
43	13,990				75	650	7,472		5	100	30		128	152	2,732		25,334
44	5,317	8,155			73	650	5,226		128	100	495			174	2,713		23,191*
大正3	299			5,200	60		4,709		141	103	810		85	71	3,976	320	15,774
4					60		6,100		25	25,314	149	2,891		370	7,497	400	42,806
5																	
6				6,800	1,100		4,245	20		18,560	1,230	2,898	120	370	2,100	645	38,088
7				7,000			3,455	50		790	795	1,758	190	342	300	550	15,230
8							235	80		170	1,285	1,100	250	330	100	375	3,925
9							22,150	30		620	1,125	962	800	80	880	50	26,697
10							80,000					80			2,280		10,360
11							6,360				42	100			15,121		21,623
12	22						6,820	14						112	16,091		23,059
13							6,210		36						17,929		24,175
14							5,000		35					613	18,077		23,725
15							16,000							160	33,205		49,365
昭和2							15,064								17,645		32,709
3							18,520								42,063		60,583
4							12,520							195	39,301		52,016
5							14,800							255	41,031		56,086
6							—								—		53,261
7							1,482								47,971		49,453
8							1,450								36,543		37,993
9							1,600								24,736		26,336
10							—								—		38,833
11							800								28,043		28,843
12															29,581		29,581
13																	9,949**

備考 • 『京都府統計書』より作成。

• 大正4年以降は「縞木綿」のみの生産高。

\* 数字は原統計のまま。

\*\* 「商工省統計」による。

生産が行われていたものなのか、まず統計を繙いて見ることにする。〔表1〕は『京都府統計書』より「縞木綿」の項について作成したものである。これによると、府内の各郡の縞木綿の生産が大正10年（1921）前後で統計から姿を消すのに対し、中郡では相楽郡と並んで非常に長期にわたり恒常的に生産が続けられており、生産量も昭和期に入ると相楽郡より勝っていることがわかる。この中郡産出の縞織物の主力が荒山縞であろうと思われる。このような縞木綿の生産がどのような形態で行われたのか、聞きとり調査をもとに実態を記す。

#### 〔生産時期と生産形態〕

商品としての荒山縞が織られるのは明治末年頃から昭和10年代つまり第二次世界大戦前までである。これは統計からも明らかである。明治42年から中郡における生産量は激増しているし、昭和13年には生産が著しく減少している。（表1参照）この間を生産様態からだいたい二つに分けることが出来る。昭和2年の丹後震災がその分岐点となる。前半期は農家の副業として、農家の女性によって織られていた手織りの時期であり、後半期は主として力織機により生産が行われる時期である。この二つの時期をそれぞれ代表する如き人物の経験談を中心にこの間の事情をたどって見る。

荒山中野地区在住のMさん—明治35年（1902）生。男一は、この前半期に生産にたづさわりの、家が検査宿に当てられていたという。この検査宿は、各地区に置かれており、小島地区ではお寺が当てられていたという。ここに月に2～3回、税務署から出向いて来て織物の検査をした。当日各農家からは織り上った反物を持って集って来た。目方や打込みや傷の有無などの検査を受け、検査済の印を各反物に捺してもらい持ち帰る。つまり、農家の副業として織られたものに一定の品質管理を行い商品として認定し、税対象としたのである。検査宿が置かれていたのは昭和2年の丹後震災の頃までである。以後は農家の副業としての生産形態が、力織機による多量生産に変わり、この制度もなくなる。

前半期、農家の副業としての機織は、雪のある間の女性の冬仕事であった。Mさんの母親が織っている頃には織機も「ころんちゃこす」と呼ぶ古い式のものであった。Mさんの奥さん—明治37年（1904）生一は、小学校高等科に行く頃には（大正6～7年頃）もう機織をしていたが、その頃には「ばったん機」を使い、後には「足踏織機」を使うようになった。やがて動力織機が中野地区にも2～3台入り、その外に縮緬織機

表2 綿織物機業戸数及び機台数  
（京都府中郡の場合）

	機業戸数 (戸)	機 台 数 (台)	
		手 織 (小幅)	力 織 機 (小幅)
大正10	34	34	0
11	84	85	8
12	65	73	13
13	99	104	17
14	81	89	31
15	96	94	68
昭和2	45	39	47
3	44	30	56
4	33	19	70(小) 1(広)
5	31	12	65(小) 1(広)
6	—	—	—
7	23	5	64
8	16	5	64
9	10	2	50
10	—	—	—
11	9	2	51
12	8	0	57

備考 『京都府統計書』より作成。

を改造して使う家かなり出て来る。しかし、主として手織、足踏織機であった。綿織物機業に関する統計によると（表2）中郡の場合、力織機が統計に上って来るのが大正11年である。

昭和2年の丹後震災を機会に、盛んだった手織も下火になり、少しは織られていたが殆んど縮緬機に変わってしまう。残る木綿機は急激に動力機に変わり、専業として製織を行う家が出て来る。一家に3台から5～6台の機を置く製織専業者が中野地区でも3～4軒あった。小島地区でも同様で、Nさん—明治41年（1908）生。女一の家もその一軒であった。専業といってもそれに従事するのは家族のみであった。農家の副業的なものも全く姿を消したわけではなく、併存していたし、出機も少しはあった。この生産形態は第二次世界大戦の頃まで続くが、この頃、糸の入手が困難になり殆んど一斉に廃業することになる。

明治末年から昭和戦前までの荒山縞の生産形態は、このような変化をみせるのであるが、その生産形態の変化は〔表2〕の数字にもよく表われている。これによると大正10年には機業戸数と手織機台数が同数であり、農家の副業的性格をよく表わしている。以後次第に戸数も手織・力織機も共に増加し、生産が盛んになって行く様子を示すが、昭和2年には機業戸数も機台

数も激減し、震災による影響が表われている。その後、急激に手織機は姿を消し、力織機にかわり、機台数に対し機業戸数は少くなる。つまり専業化の状態を示しているのである。

#### 〔生産工程〕

◦糸の購入と染色：まず綿糸の購入から仕事は始まる。峰山に糸屋が二軒あった。中でも福井房蔵商店は、糸の販売、染色を手がけ、織機も置き、機屋も兼ねていたようだ。各農家ではここへ糸を買いに行き、染めもこの店でしてもらった。昭和期になり動力機で織る様になると大阪方面から糸を買い込んだ。トラックで運んで来た。染色はこの峰山の糸屋でしてもらった。

◦糊つけ：うどん粉を炊いて糸に糊つけする。適度な濃さにつけ、総糸のまま竿に干す。これは主に年寄りの仕事であった。

◦総繰り：総に掛けて繰る。だいたい各家ですが、これを商売にしている人もいた。

◦整経：足踏織機を使っている頃には、2・3軒寄り合って整経機を買い入れ共同で使った。広い場所があるので空いた小屋などに据えつけ、各自がここへ来ては整経をした。これは男の仕事であった。

◦織り：「ころんちゃこす」は能率が悪く二日に1反ぐらいしか織れなかった。「ばったん機」になるとやや能率がよく、もう少し速く織れた。「足踏機」になると一日に1反ぐらい、「動力織機」は一日に4～5反織れた。並幅で一反は2丈8尺である。

#### 〔販売方法〕

秋の農繁期がすむと農家の主婦がこの木綿織を持って行商に出かける。これは昭和期になって専業化されてからも同じで、織手も仕事のない時には行商に出た。また、専門に売りに歩く人もいた。大正初期には中野地区で2～3人はいたと云うし、昭和期に入ると小島地区のN家に出入りする行商人は男女合わせて20人位はいたという。行商人は各自織手の家に出向き、好みの反物を集める。買い取りではなく品物を借りて行く。売れた分だけ後で支払う。売れ残った品物は返す。遠方まで行商に出かける場合は、常宿に品物を送り届けた。行商人の中でも「おくめばあさん」はよく売る人としてこの地の人々の間で語り草になっている。売れ行きのよい柄を注文して織らすので、その柄を「おくめ縞」などと呼んでいたという。このように行商人は柄の注文をもらって来たり、よく売れる柄を注文したりした。

販売地域は丹後一円から丹波、浜作、敦賀、福井、

大阪、江州あたりまで、かなり広範囲にわたっていた。売れ行きは非常によかった。いくら織っても織っても売れたという。これは動力機の時代になっても同じで、一台で一日に4～5反織れたからどんどん織り上り、家には山のように反物を積んでいたが非常によく売れたという。

#### 〔荒山縞の特徴〕

この縞木綿は、太めの糸を使い糊を強くつけて織ったものでコンコンする堅い織物であった。平織で並幅、一反は2丈8尺。格子縞か経縞が主で、せいぜい3～4色位までの糸で織る。藍染であるが、後には藍染は高くつくし、洗った時色が出るのであまり売れ

表3 中郡における「双子その他縞木綿」  
生産高と価額

	生産量(反)	生産価額(円)	一反当り価額 (円)
明治39	690	759	1.10
40	158	248	1.57
41	300	210	0.70
42	4,008	2,895	0.72
43	2,732	2,873	1.05
44	2,713	2,464	0.91
大正3	3,976	2,964	0.75
4	7,497	7,504	1.00
5			
6	2,100	3,549	1.69
7	300	750	2.50
8	100	400	4.00
9	880	2,880	3.27
10	2,280	5,495	2.41
11	15,121	28,670	1.90
12	16,091	31,307	1.95
13	17,929	37,697	2.10
14	18,077	36,179	2.00
15	33,205	50,129	1.51
昭和2	17,645	27,422	1.55
3	42,063	62,365	1.48
4	39,301	57,806	1.47
5	41,031	44,705	1.09
6	—	—	—
7	47,971	46,483	0.97
8	36,543	39,606	1.08
9	24,736	26,866	1.09
10	—	—	—
11	28,043	34,198	1.22
12	29,581	39,963	1.35

備考 『京都府統計書』より作成。

ず、硫化染がよく売れた。硫化染は早くきたなくなった。かすり糸も少しは使った。動力機では12番手の糸を使ったが、それも戦争近くなって来ると16番手20番手の糸しか入手出来なくなった。

用途は仕事着、蒲団地、三幅前垂などで、この地の娘達も仕事着にはこの縞を着たが、品が悪いといってあまり着たがらなかった。とにかく安い品物であったという。統計から見ると一反の値段は〔表3〕の如くであり、大正6～14年頃は比較的高値であるが、他の時期はだいたい1円前後の反当り生産価額である。

(写真⑦～⑩)

丹後縮緬の産地であるこの地で、このように一地域

に限り綿織物が生産されたことは不思議な気がする。また縮緬産業の陰にかくれて、このような綿織物の歴史があることはあまり知られていない。何故この地域にこのような綿織物の生産が行われたかという点について、Mさんは、「この荒山の地域一帯は大百姓で忙しかったから縮緬屋がなかった。だから縮緬機がなく、農家の副収入として、自家用の綿織物を少し拡大したような型で綿織物が盛んに織られるようになったのだ」という。なるほど、この地域は現在も美しい田園地帯である。因みに大正5・10年の『京都府中郡現勢一斑』から米の生産高を見ると〔表4〕の如くであり、荒山を含む新山村が<sup>4)</sup>、他村に比べ収穫高を誇る

表4 中郡における米作状況

	大 正 5 年			大 正 10 年		
	作 付 反 別 (反)	収 穫 高 (石)	一反収穫高 (石)	作 付 反 別 (反)	収 穫 高 (石)	一反収穫高 (石)
峰 山 町	8.5	17.0	2.000	405.0	683.5	1.688
吉 原 村	1,900.0	3,575.0	1.882	1,714.0	2,571.0	1.500
五 箇 村	2,514.4	3,993.3	1.588	2,488.0	3,865.0	1.554
長 善 村	1,801.4	3,413.9	1.895	1,791.0	2,647.0	1.478
口大野村	755.0	1,259.9	1.669	766.0	1,102.0	1.439
奥大野村	670.0	1,273.0	1.900	648.0	928.0	1.432
常 吉 村	928.0	1,484.8	1.600	926.0	1,239.0	1.338
三 重 村	1,897.0	3,482.4	1.835	1,893.0	2,994.0	1.582
五十河村	1,588.3	3,186.0	2.006	1,544.6	2,688.0	1.740
周 枳 村	1,000.0	2,000.0	2.000	1,020.0	1,630.0	1.598
河 辺 村	1,086.0	2,048.4	1.886	1,060.0	1,258.0	1.187
新 山 村	2,056.6	4,298.0	2.090	2,072.0	3,526.0	1.702
丹 波 村	2,514.0	4,749.7	1.889	2,087.0	3,173.0	1.520

備考 『京都府中郡現勢一斑』大正5年、大正10年版より作成。

地域であったことがわかる。

ところで、この荒山縞の生産形態は繊維産業の近代化の流れの中ではかなり後進的性格を持つものであった。例えば織機については、新しいものの導入の時期は他地方にくらべ非常に遅れている。「ころんちゃこす」と呼ばれる古い織機が大正期になるまで使用されていたり、大正中頃にもまだ「ばったん機」を使っていたりする。使用織機の移行は各地方で時期を異にしているのであるが、因みに伝統的織物産地である尾西地方では明治24年以後「ばったん機」が導入され普及しているし<sup>5)</sup>、明治40年代に入ると「ばったん機」から「足踏機」に移行する<sup>6)</sup>。動力織機への移行は40年代以後で他地方にやや遅れをとっているといわれる<sup>7)</sup>。荒山では大正11年に力織機がはじめて統計にあらわれるし、これが普及するのは昭和2年以後という状態で

ある。

こうした農家の副業にはじまる後進的地方的小規模な産地による織物ではあるが、かなり広範囲な農山漁村地帯の人々の衣生活をきめ細かく満していたことが明らかである。丹後地方における自給的製織は明治30年前後に生まれた人たちが青年期に達する頃、つまり大正初期頃を境に姿を消していったとみられる。そして、荒山縞が盛んになるのが丁度この頃からである。自給的に製織されなくなった仕事着や日常の衣料の提供をこの縞が担ったのであろう。自給的製織が行われなくなった時、これらの人々の衣生活は直ちにすべてが近代的産業生産による織物や、遠方の大生産地による製品によって置き替えられたのではなかった。最も実用的な必需品である仕事着や日常着などには、自給的製織品と近い地方的小規模産地の廉価な織物が観迎



されたのである。

# 謝 辞

本調査に当りましては、丹後在住の多くの方々に一方ならぬ御協力をいただきました。ここに御協力いただいた方々のお名前を列記させていただき、心から感謝の意を表します。（敬称略，生年順）

（岩滝町）岩本しお，糸井志満，岩本智恵子，橋本，（宮津市）小嶋善蔵，高岡ひさ，小川藤吉，吉岡初衛，小川つや，小嶋きく，谷口喜一郎，谷口なみえ，（大宮町）坪倉花枝，野村はな，（峰山町）長谷川喜久，高尾のぶ，藤原糸，西村秀雄，小西てる，西村きみ，高尾源左衛門，荻野ふで，飯井，増田なか，

（弥栄町）江宮豊蔵，片山政治，田家幸四郎，木下弘一，今井芳夫，田宮つる，木下広志，（伊根町）小西むめ，浜野りよ，小西みつえ，（丹後町）増田，（網野町）吉岡実二，三宅ふさ，（久美浜町）中村つや子，辻本カズ，岡田花枝，杉本鍊太郎，野村重光，松田哲夫，

なお，井上正一（網野町郷土資料館），井之本泰（丹後郷土資料館），中村喜三郎（京都府織物指導所）の諸氏には，いろいろと便宜をはかっていただき，また

多くの御教示をいただきましたこと，厚く御礼申し上げます。

（1984年7月31日受理）

# 〔注〕

- 1) 『丹後半島学術調査報告』，昭和58年3月発行，京都府立大学，京都府立大学女子短期大学部。
- 2) 詳しくは，京都府立丹後郷土資料館『藤織りの世界』（1981.10月刊），染織と生活社刊後藤捷一監修『日本伝統織物集成』（世屋藤布）にゆずる。
- 3) 菅，峰山あたりでも織られていた。
- 4) 明治22年4月1日に新町，荒山，内記の三村が合併して「新山村」を結成（京都府令第26号）。昭和30年1月1日，村を廃し峰山町となる（京都府告示992）。
- 5) 古島敏雄著『体系日本史叢書12，産業史Ⅲ』（P.456）によると，「尾西地帯は明治24年10月28日の濃尾大地震によって大きな被害をうけ，機業も建物機具の大損傷をうけた。この震災復旧工事のため岡崎方面から来た大工たちによってバタタン機が作られ，以後バタタン機が導入，普及した」とされる。
- 6) 同上書（P.460）によると，「明治18年に桑名で松田式足踏機が発明された。」
- 7) 同上書（P.460）によると，「明治43年頃には数十種の国産動力機があった。」